

全学日本語プログラムの取組と課題 —アカデミック・ジャパニーズ能力向上の観点から—

藤森弘子・鈴木智美・鈴木美加・中村彰・花園悟・藤村知子・柳澤絵美

【キーワード】 全学日本語プログラム、アカデミック・ジャパニーズ能力(AJ能力)、総合日本語、JLC日本語スタンダード、IJ共学

1. はじめに

日本の高等教育機関¹に留学する学生数は年々増加傾向にあり、2009年度のJASSO²の調査では約13万2千人となっている。文部科学省高等教育局による「大学の国際化と留学生政策について」の提言には、大学の国際化を推進するための「大学の質保証」及び「質の高い外国人学生」を養成する方策が求められると記されている。そのためには日本語プログラムにおいても国内外の大学間の単位互換等が可能となるような教育の標準化や、高等教育の勉学に必要なアカデミック・ジャパニーズ能力の向上を目指した留学生教育プログラムの提供など、質の保証のための方策が必要となってくるといえる。

本学に留学してくる学生数は2010年5月1日現在で609名³となっており、全体学生数⁴の約14%を占めている。本学では、他に比して大学の全体学生数に占める留学生の割合が高い上に、中級以上の学生数が80%以上であることから「アカデミック・ジャパニーズ」を意識した教育がより重要となってくると思われる。

本稿ではまず、「アカデミック・ジャパニーズ能力」とは何を指すのかを先行研究の中から取り上げ考察する。次に、様々なカテゴリーの学生の受講を受け入れている「全学日本語プログラム」の各レベル別の授業目標、受講学生の内訳、実際の授業実践報告等⁵をもとに、本プログラムの取組を概観する。そして、本プログラム

¹ 大学・大学院、短期大学、高等専門学校、日本語学校等を指す。

² (独)日本学生支援機構のこと。

³ 本学学部・大学院所属が530名、留学生日本語教育センター所属が79名である。

⁴ 学部在籍者数3792名と大学院553名を合わせた総数4345名に対してである。(平成22年5月1日現在、東京外国語大学(2010)『東京外国語大学データ集』より)

⁵ 2010年度より「レベル・コーディネーター」を全学日本語プログラム運営委員会の中に新たに設置し、各レベルの授業内容のコーディネートを強化している。

学期末の学生アンケート結果から、①受講学生たちが授業や教師・教材などに対して満足しているか(満足度)、②授業によってどのような能力が伸びたと感じたか(上達認識度)について考察し、今後の課題を探ることを目的とする。

2. アカデミック・ジャパニーズ能力(AJ能力)とは

ここではアカデミック・ジャパニーズ能力(以後、「AJ能力」と呼ぶ)の捉え方が様々であることを示す。

2-1 日本語教育から専門教育への「橋渡し教育」

横田(1990:121)は、留学生が大学・大学院での勉学・研究を行うためには会話が滑らかに話せるだけでは十分とは言えず、専門分野の内容を学ぶための認知的技能や学習技能をも含めた日本語の習得が不可欠であると指摘している。当時の上級の日本語教育では大学での専門教育を意識したプログラムが標準化しているとはいえなかった。そのため、横田(1990)は日本語教育から専門教育への「橋渡し教育」が必要であるとし、言語と内容を統合し、4技能を統合した形のカリキュラムで教育するのが効果的であるという言語教育観を支持した。実際、英語教育などですでに行われている「アジャクント・プログラム」や「イマーション・プログラム」は専門教育の教員との連携により実現可能なプログラムである。

一方、専門教育へ移行する橋渡し教育としての「コンテンツベースのミニコース」や「技能養成プログラム」「研究目的のための日本語(Japanese for Academic Purposes)プログラム」は日本語教員だけでも教授可能であり、JAP教材・技能別教材の開発などを推進することが今後の課題であるとしている。ここでいう「橋渡し教育」がAJ能力を向上させるための教育につながると思われる。このような考えをシラバス指標として具体化したものが「JLC日本語スタンダード」(2007,2009⁶)であるといえる。横田(2006)はその後「技能別養成プログラム」の強化を目指してスタンダード研究会を結成し、技能別・段階別の教授項目を立て、技能別授業を行う際の行動目標を示し、大学で必要な日本語力及び技能養成のための指標を作成するに至った。これには行動目標も立ててあるため、can-do statementsとしても活用できる可能性があるが、技能統合型授業⁷については本スタンダード表では直接的には示されていない。

⁶ 東京外国語大学 JLC 日本語スタンダード URL を参照のこと。
<http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/jlc-gp/jp/2100.html>

2-2 AJとは教養教育である

門倉 (2006:7-13) は、大学での勉学の根本は「学び方を学ぶ」ことであり、専門領域の学び方を学ぶ教育こそが学生にとって有意義な教育になるとしている。その意味で「問題発見解決学習」は重要であり、これは概念的に初等・中等教育での「総合的学習」とつながる。また、AJの土台となるのが「市民的教養」であり、それを構成する総体は「知的教養」と「コミュニケーション力」からなると考える。市民としてのコミュニケーション能力とは「自分を表現し、他者と出会い、他者につながる」力のことを指し、学びとコミュニケーションの日本語力を養成するAJ教育では留学生、日本人学生両方が対象となる

2-3 AJ能力養成のためのAJ①・AJ②の統合

鈴木他 (2010) ではAJ能力が「大学の勉学に必要な日本語力とそのスキルの養成 (AJ①)」（横田：1990）と「大学教育で求められる能力養成の一環 (AJ②)」（門倉：2006）と異なった捉え方があることを踏まえ、全学日本語プログラムの「総合日本語」ではその両者を統合した形のAJ能力向上を目指した授業実践を行っている（図1参照）。「総合日本語」は本プログラム300レベル（初

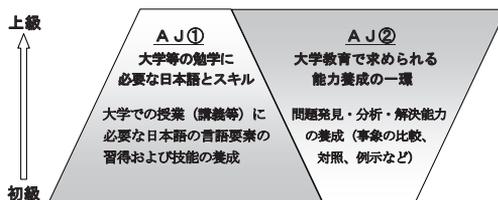


図1 アカデミック・ジャパニーズの2つの視点（鈴木・中村・藤森 2010）

中級）から700レベル（上級後半）で開講されており、300、400、500レベルでは週5コマ、600レベルは週3コマ、700レベルは週2コマ開講されている。授業運営及びタスク設定の方針としては、以下のような特徴がある。

- ①学生の多様性を生かし、発信型の活動を行う
- ②学生が有する「アカデミック・スキル」を活用できるようにする
- ③学内の日本人学生を交えて行うタスクを組み込む
- ④運用力を支える言語的知識の増強を図る

アカデミックな日本語運用能力を高めるためには、AJ①〈言語知識＋言語技能〉という能力とAJ②〈問題発見・分析的思考力・問題解決能力〉といった能力の両者

⁷ 1つの技能を主に伸ばすための授業ではなく、4技能を統合して日本語運用能力を向上させようという狙いの授業形態をさす。例えば、本センター1年コース・全学日本語プログラムでは「総合日本語」と呼ばれる授業にあたり、コミュニカティブ・アプローチでは「プロジェクトワーク」が近似である。

が必要であるとし、その養成のために「総合日本語」が位置づけられるとしている。ただし、同じ授業名称であっても、図1のように習熟度に応じてAJ①とAJ②の割合が異なると指摘している。さらに、AJ能力の養成はタスク型活動・内容中心のシラバス⁸によるところが大きいことも特徴であるといえる。

3. 3つのアーティキュレーションとAJ能力養成の関係

冒頭で述べたように、質の高い学生を養成するには教育の質の保証のための標準化や連続性が求められる。「アーティキュレーション」という用語は當作(2010: 133-139)が用いており、従来は教育の縦の連続性・継続性のことを指していたが、同じプログラム内の同レベルのクラス間、同レベルのプログラム間の横のアーティキュレーションもあるとしている。本稿では、これらを踏まえて、以下の3つのアーティキュレーションを提案する。

- ① 初等—中等—高等教育
- ② 初級—中級—上級
- ③ 留学前—留学中—留学後

當作は米国のナショナル・スタンダーズではK-16という幼稚園から大学4年生までの一貫した日本語教育プログラムを考えるべきだと主張しており、それが①のアーティキュレーションにあたる。日本国内においても、外国人生活者とその子弟が増えてきていることを考えると、日本語指導においても①の連続性を示すことが重要となる⁹であろう。

②のような習熟度別の縦の連続性は以前から言われてきていることであるが、特に最近では自国で初級を勉強してきて、日本で中級以上の学習を行うものや、海外でも1つの地域だけで日本語を学ぶのではなく、複数の地域にわたって日本語を学ぶ学生が増えてきたという背景があげられる。例えば、欧州では経済統合だけでなく、教育統合も目指すべく、複言語主義の推進や高等教育改革などの動きがあり、「CEFR¹⁰」(ヨーロッパ言語共通参照枠組み)が実施されてきている(ヨーロッパ日

⁸ 工藤(2010)はAJ能力に求められるものとして学術的知識、思考力、表現力の3つを挙げている。

⁹ 本センターでは文部科学省の委託研究として、外国人児童生徒の総合的な学習支援事業の一環で学校において利用可能な日本語能力の測定方法の開発および日本語指導法の開発を3年計画で行っている。

¹⁰ Common European Framework of Reference for Languagesの略で、欧州評議会が中心となって1970年代から言語能力を示すためのヨーロッパ共通の枠組みを開発している。

本語教師会(2005))。欧州の日本語教育もその流れの中で、実践とその検証、問題点や課題の抽出などが行われてきているといえる。

③については冒頭で述べたように、日本に留学する学生数が増えてきており、日本の大学の国際化のためにも「質の高い外国人学生」を輩出することが重要であるとしている。短期プログラム等による交換留学生数も増えていることから、「留学前—留学中—留学後」のアーティキュレーションを考慮したプログラムモデルも開発の必要があるといえるだろう。ガーストル(2010:15)によると、英国ロンドン大学SOASの日本語科が留学生プログラムに期待することは、1) おおよそ6コマ単位程度の厳格で集中的な日本語の授業と2) 日本語ないしは英語で行われる日本文化や社会についての授業で、かなりの読書量と要求度の高いレポートが求められるもの、である。また、もし学生に十分な日本語力があるならば、後期には自分の専門分野で日本人学生を対象にした通常の科目から、1、2科目受講できるような制度があれば理想的だとしている。③のアーティキュレーションでは留学前の学生のAJ能力を知り、留学中、留学後AJ能力がどのように養成されるかも連続性として考えていくことが日本語教育のアーティキュレーションにつながると考える。本プログラムにおいては、特に②と③が必要であるといえる。

上記3つのアーティキュレーションがうまく連携されれば、単位互換など教育の質の保証がなされることになるであろう。

4. 全学日本語プログラムの取組の現状

4-1 全学日本語プログラム(JLPTUFS)とは

「全学日本語プログラム(JLPTUFS)¹¹」は本学留学生のための日本語プログラムとして、2004年度に留学生日本語教育センターが主体となって、様々なカテゴリーの学生たち¹²の日本語プログラムを統合する形で発足した。それまでは、研究留学生の授業、補講といった形態で別々に実施されており、一貫したプログラムとは言えなかったものを統合して、合理化・効率化を図ったものである。ここではどのカ

¹¹ 本学HPhttp://www.tufs.ac.jp/common/jlc/program/program_ja.html参照。本プログラムの立ち上げについては坂本(2005)が詳しい。

¹² 全学日本語プログラムには研究留学生(大学院入学前予備教育)、日本語・日本文化研修留学生(日研生)、教員研修留学生(教研生)、ISEPTUFS(本学の短期交換留学プログラム)及び特別聴講学生、国費・私費研究生といった5つのカテゴリーの学生が学んでおり、各カテゴリーのアドバイザーをおいている。その他本学の大学院学生(平和構築・紛争予防専修コース)やAA研の研究生なども一部受講している。

テグリーの学生であろうと、自己のニーズ・習熟度に応じて日本語が学べる。学習内容についてはJLC日本語スタンダードを参照したシラバスで、教育の質の維持を図っている。学生は最初にプレイスメントテストを受けてその結果で各レベルにプレイスされる。

体制としては習熟度別に8レベルのコースを設定し、春学期(4-8月)・秋学期(10-3月)の2学期制で、習熟度や目的に応じて日本語の授業を受講できるようになっている。全開講授業数は2010年度春学期は87コマ¹³で、同学期の受講学生数は206名である。出身地域は49カ国・地域で、内訳としては、アジア地域からは約51%、欧州から約33%、北米・中南米は約9%、中東・アフリカ・大洋州合わせて6%ほどの割合になっている。

本章では各レベル別¹⁴にAJ能力を向上させるための取組として、100・200の「集中」及び300から700では「総合日本語」の授業内容を主として説明する。

4-2 入門100レベル

100(入門)レベルは、90分の授業を週に10回(毎日午前中に2コマずつ)行う「集中」コースの形態をとる。1学期間(15週)で初級の内容を一通り終えるコース設定となっている。100レベルを終了すると、学生は300(初中級)レベルに進級することができる。ただし、100レベルの内容が未消化であるなど、復習を要すると思われる場合は、200(初級)レベルに進み、初級後半から復習しつつ、勉学を継続することとなる。

クラス人数は毎学期10名前後で推移している。春学期は、国費研究留学生(予備教育課程)がクラスの大半を占めるが、秋学期は、国費研究留学生(予備教育課程)のほかに、教員生、ISEP学生¹⁵、私費研究生などである。

使用教材については、2008年度秋学期より、本センターで開発された新しい初級テキスト『大学生の日本語』(Elementary Japanese for Academic Purposes) Vol.1, Vol.2を使用している。基本的に文法・語彙積み上げ式のシラバスで、各文型には教室ですぐに使えるように、基礎的な練習からアクティビティを含む応用的な練習までがそれぞれ配置されており、実際の使用場面を考えた短い会話練習も多く組み

¹³ 1コマ90分である。

¹⁴ レベルコーディネーターである100:鈴木智美、200:藤村知子、300:鈴木美加、400:柳澤絵美、500:花園悟、600:藤森弘子、700・800:中村彰(敬称略)から各レベル別に報告されたものを基にしている。

¹⁵ 「ISEPTUFS」(International Student Exchange Program, TUFs)のことで、交換留学で来る本学の短期留学生プログラムの学生のこと。

込まれ、音声CDを利用しながら随時聞き取りや会話練習も行っている。文字については、ひらがな未習者は、コース開始前に五十音のひらがなを学習しておき、漢字学習はコース開始3週目からスタートし、約300字を学習する。また、ほぼ2週に1回のペースで文章表現の時間を設け、身近なトピックについて400～600字のまとまった文章を書く練習を順に行っている。「初級レベルからのアカデミック・ジャパニーズ能力の育成」が今後の課題でもあり、それに応じて教科書の改訂も行っていく予定である。

4-3 初級200レベル

200レベルでは、初級後半から学習を開始し、中級前半レベルの内容まで進むことになっている。100レベルと同様、毎日2コマ(90分×2)の授業を15週間行う。初級教科書が終わった段階で中間試験を行い、学期終了時に期末試験を行う。成績がA(80～100点)の場合は400レベルに、B(70～79点)の場合は300レベルに進級できるが、C(60～69点)の場合は200レベルを再履修することになる。2010年春学期の受講学生数は10名であった。

教材として、初級後半は『大学生の日本語 Vol.2』(14～26課)、中級前半は『中級日本語¹⁶⁾』(1課～8課)を使用した。同時にJPLANGの『中級日本語』の音声及び語彙の英訳なども自律学習用に活用した。

授業の進め方として『大学生の日本語』は、直接法による文型積み上げ方式でまず、文型の導入→語彙を導入しつつ、教科書の練習→会話の導入と暗記→翌日暗記チェックとディクテーション→課が終わったところで、読解と聴解という流れで行った。副教材として、課ごとに文法練習と漢字のプリントを宿題として利用した。『中級日本語』は、その副教材である『語彙・文型例文集』のみ購入してもらい、『大学生の日本語』と突き合わせて抜けている漢字を補ったプリントとクイズ等を作成した。インプットの授業が多かったので、今後は、アウトプットとしての「スピーチ」「会話」「作文」の時間も確保したい。また、直接法による授業に慣れていない学習者もいるため、最初に勉強方法や学習ツール¹⁷⁾についての説明を行うほか、初級前半の文型項目の復習の時間を設け、学習者に落ちている部分を拾いながら初級項目を固めたいとも考えている。

¹⁶⁾ 東京外国語大学留学生日本語教育センター編著(1994 凡人社)『中級日本語』

¹⁷⁾ 例えば『初級日本語』に対応したeラーニング教材 JPLANG <http://jplang.tufs.ac.jp> を自律学習用に紹介している。

4-4 初中級 300 レベル

300 (初中級 : pre-intermediate) レベルでは、初級レベルを終了し、それらの日本語の知識を使ってコミュニケーションができる学生を対象としている。学期によって受講学生の人数は変動があるが、2009年度春学期以降は15名前後で推移している。受講者の半数以上がISEP学生で、他に研究留学生、教研究生、私費研究生、国費研究生が学期ごとに各1～3名履修している。300レベルというのは、日本語の初級の知識及び運用能力を基礎に中級に移行するレベルである。開講科目は、「総合」「語彙・文法」「読解」「聴解」「文章表現」「口頭表現」の6科目であり、開講コマ数は、総合クラスが週5コマ、それ以外は週1コマである。

このレベルの問題点として、国・地域によって「初級」終了程度の初級レベルが一定ではなく、母国で初級終了程度とされていても本学のレベルに合わせると初級半ばの能力程度になってしまう場合もあり、プレイスが難しいこともある。

「総合日本語301」については、300レベルにプレイスされた学生の9割以上が履修している。授業の目標は、①身近な話題を取り上げた文章を読んだり聞いたりして、その内容について簡単に説明できる、②自分の経験や知識を、作文に書いたり話したりして、ほかの人に知らせたり、話し合ったりできる、③中級初めの文法や言葉を学習して使えるようにする、の三点である。中級前半では、運用能力を高めるために確実に使える語彙や文法の知識を固めることが必須である。教科書は『日本語5つのとびら—中級編—』(2008)を使用している。同教科書は句型・語彙などが中級前半に合っており、「読む」「話す」「書く」の技能を伸ばすための活動が組み込まれていることが特徴である。教科書の活動以外に、「食堂での日本人学生へのインタビュー」、「日本人学生を交えたミニ発表と話し合い」などを行った。学生の授業記録シートから、日本人学生参加による交流型の授業が学生にとって日本語学習のモチベーション向上になると同時に、日本語使用の自信にもつながっていることがわかった。授業での交流が学生にとっての一つの成果であり、それに向けた問題探索、作文、口頭発表などの各活動が習得の重要なプロセスになっていると思われる。

4-5 中級 400 レベル

400レベルは、初級を修了した学習者を対象とした中級のレベルである。中級の言語的要素を学習するとともに、それを用いたアカデミックな日本語の運用力を身につけ、中上級への移行を視野に入れた総合的な日本語力を養うことを目標としている。開講科目は、300と同様である。400レベルの学習者の約60%はISEP学生

であり、次いで私費研究生が全体の20%ほどを占めている。教研究生、研究留学生、国費研究生は10%以下である。

「総合日本語401」は、特定の技能だけでなく、総合的な日本語力を身につけるためのクラスである。教材は『日本語5つのとびら—中上級編—』(2008)を主教材とし、必要に応じて自作教材も用いた。学習目標は、中級の文法項目や語彙などの言語的要素を習得するとともに、学んだ文型や表現を用いた口頭発表や文章表現などの産出系タスクを多く取り入れ、AJ能力を養成することである。

産出系タスクの活動としては、①文体を意識して「話し言葉」と「書き言葉」を使い分けられるように口頭表現で行ったタスクは書き言葉に直して作文を書くようにした。また、②話の流れや論理の展開に飛躍や矛盾などがなく学習者自身で確認できるように「論理的な思考を組み立てる練習」を行った。更に、③口頭発表やディスカッションの際には、日本人学生の参加を募り、留学生と日本人学生とのアカデミックな活動を中心とした交流を通して「IJ共学¹⁸」の促進を図った。最後に、授業全体を通して行った活動として、④「自己評価」活動を取り入れた。これにより、「何ができるようになったか」「何がまだ足りないか」を学習者自身に意識させ、伸び悩みが指摘される中級レベルにおいて学習意欲を維持し、克服すべき課題を明確にすることで日本語学習の促進に生かすようにした。

4-6 中上級500レベル

500(中上級)レベルの開講科目は、「総合日本語」(週5コマ、a,bの2クラス)、技能別クラスとして「文法」「読解」「聴解」「口頭表現」「文章表現」(週1コマずつ)である。受講学生としてはISEP学生が約60%を占めている。殆どの学生が週5コマの「総合日本語」科目を履修している。

「総合日本語501」は、聴解や口頭表現などの特定の技能でなく、4技能すべてを含めた総合的な日本語力を身につけるためのクラスである。その基礎として文型や語彙・表現などを身につける必要があるため、中上級の文法項目や語彙を習得するとともに、学んだ文型や語彙・表現を用いて読む・聞く力を高め、さらに口頭発表やディスカッションのタスクを取り入れて、AJ能力を高めることを学習目標とした。

主教材は『国境を越えて』(2007)で、そのうち1、2、6、8課を学習した。テーマは1課「自国の文化紹介」、2課は「人口問題」、6課「環境問題」であり、タスク活動としては、1課でプレゼンテーション、2、6課で司会者を立てたディスカッション、

¹⁸ 本学では日本人学生と留学生との交流促進を目標としており、それを「IJ共学」と呼んでいる。

それぞれの準備段階でタスクシート(レジュメの作成)、スクリプト(作文)の提出・フィードバックを行った。

4-7 上級前半 600 レベル

600(上級前半)レベルでは、「総合日本語」クラスが週3コマ、技能別クラスとして「文法」「読解」「聴解」「口頭表現」「文章表現」「時事日本語」が週1コマずつ開講されている。日本語レベルとしては、大雑把ではあるが旧日本語能力試験(以後「日能試」)2級以上で、1級を目指すようなレベルである。CEFR基準でいうと「B2」あたりに相当するのではないかと考える。

受講学生のカテゴリー別割合¹⁹として、最も多かったのは ISEP 学生及び特別聴講生の 52% である。次に私費・国費研究生が 32%、日研生 11%、研究留学生は 5% ほどである。週3回の「総合日本語」科目を履修するものが多く、自己の弱い技能を補う、日能試受験準備などのために技能別科目や漢字・発音クラスを受講しているようである。

「総合日本語 601」は 2009 年度春・秋学期は週5コマであったが、2010 年度からは週3コマとなった。この授業の特徴は、科目名のとおり、総合的に日本語を使うことによって大学の勉学に必要な日本語能力を高めるということである。使用テキストは『国境を越えて』(2007)で3、4、5、7、9、10課を扱った。授業目標は「大学での授業に対応できるように専門的な文章の読解、内容理解、資料の読解、ノートテイキング、口頭発表の技能を磨く」ことで、教科書を使った授業以外に、プレゼンテーション・ディスカッション・ディベート・日本人への調査といったタスク活動を行い、期末試験でもそのような活動を通して得た AJ 能力を評価する形式²⁰をとっている。タスク活動の際には、日本人学生にも参加してもらい、意見やコメントを述べてもらった。受講学生からの感想として、「日本社会の現代に至る歴史の変容について学んだり、グローバルな問題(Global issues)を考えることができよかった」、「一生懸命データを探して、協働²¹で立論を作成していくというディベ-

¹⁹ 2008 年度秋～2010 年度春学期のカテゴリー別受講学生数の平均値である。

²⁰ 期末試験では、語彙・文法・読解・聴解以外の試験として、作文とインタビュー試験を行った。まず作文試験では教科書で「グローバル化時代の課題」を学んだことを踏まえて「英語普及による功罪—シンガポールとフィリピンの例—」という刺激文を読み、そこから問題を取り出し、自分なりの解決策を記述するというもの。口頭試験は各自日本人の行動・意識調査を行った結果について、その調査動機・背景を述べ、データの結果と考察について口頭でわかりやすく説明するというものであった。

²¹ 協働には「協働」「協同」「共同」「きょうどう」「コラボレーション」「コーポレーション」など類義表現があるが、本稿では協働作業を行うという意味で、「協働」と表記する。

ト活動がよかった」などの意見が聞かれた。

4-8 上級後半 700 レベル

700(上級後半)レベルでは、「総合日本語」クラスが週2コマ、技能別クラスとして「文法」「読解」「聴解」「口頭表現」「文章表現」「時事日本語」が週1コマずつ開講されている。日本語レベルとしては、旧日能試1級を目指す学生と既に1級を取得している学生が混在しているようなレベルである。CEFR基準でいうと「C1」にほぼ相当するのではないかと考える。受講学生の内訳としては、2009年秋学期は日研生12名、ISEPTUFS11名、国費研究生5名、特別聴講学生5名、教研生3名である。2010年春学期は私費研究生8名、特別聴講学生5名、日研生4名、ISEP学生4名、国費研究生3名、研究留学生1名であった。

「総合日本語701」では、使用教材は東京外国語大学留学生日本語教育センター編著『上級日本語』(1998)の1、2、3、4、5、6、10課を抜いた。文型導入、本文精読、内容質問に加えて、作文、プレゼンテーション(環境問題)、ディスカッション(異文化摩擦)等のアクティビティーも行い、漢字テストもほぼ毎回、授業の最初に行った。この授業の目標として、総合的に日本の大学での学習・研究活動に必要な日本語力を4技能すべてにわたって向上させることを目指した。プレゼンテーションやディスカッションには日本人学生や大学院生などにも参加してもらった。

4-9 超級 800 レベル

800(超級)レベルでは、「総合日本語」はなく、技能別クラスとして「読解」「ドラマ・ドキュメンタリー」「アカデミック・ライティング」「時事日本語」「文学日本語」が週1コマずつ開講されている。日本語レベルとしては、旧日能試1級を既に取得している学生が中心である。CEFR基準でいうと「C2」にほぼ相当するのではないかと考える。このように、800レベルは、技能別日本語のみ提供されているので、自分の弱い技能を補うためなどに技能別科目を活用しているようである。

5. 学生アンケート結果から

ここでは2010年度春学期末に行った全学日本語プログラム受講学生に対するアンケート結果を考察し、授業に対する満足度及び自己能力の上達度をみて、本プログラムに対する評価として参考とする。

5-1 調査方法及び内容

(1) 調査時期：2010年7月中旬～下旬

(2) 調査方法：日英語版のアンケート調査票をクラスで配布し、回答を得た。「大

変そう思う」から「全然そう思わない」までの5～1のスケールで回答してもらい、自由記述欄も設けた。

- (3) 調査対象及び回答者数:全学日本語プログラム受講学生 206 名に対して実施し、回答者数は 137 名(回答回収率 67%)である。そのうち、カテゴリーとしては ISEP・特別聴講生が 41%と最も多く、次いで研究生、日研生、研究留学生となる。レベル別では上級以上が6割以上を占め、中級が約3割、初級が1割ほどであった。
- (4) 調査内容:①1日あたりの平均学習時間 ②日本語学習動機 ③全学日本語プログラムの授業に対する満足度 ④同プログラムで勉強した結果伸びたと思われる知識・能力の上達度 ⑤教室外での日本語学習リソースとのアクセスの有無及びその頻度 ⑥本学日本人学生との交流について ⑦その他(自由記述)の7項目について調査したが、本稿では③④について考察する。

5-2 授業に対する満足度及び自己の能力に対する上達認識度

表1は初級(100・200)、中級(300・400・500)、上級(600・700・800)と習熟度別に満足度と上達認識度の傾向をみるため、平均値(mean)と標準偏差(sd)を示したものである。

	初級		中級		上級	
	mean	sd	mean	sd	mean	sd
満足度						
1. 授業には満足していますか	4.13	1.088	3.39	1.097	3.97	0.809
2. 授業の速度は適当でしたか	4.13	1.147	3.24	1.071	3.90	0.915
3. 先生の説明は分かりやすかったですか	3.81	1.424	3.82	1.025	4.37	0.637
4. 教科書は適切でしたか	4.13	0.915	3.62	1.051	3.85	0.906
5. 漢字の勉強は適当でしたか	4.25	0.775	3.62	1.051	3.96	0.963
上達認識度						
1. 文法能力	4.13	0.885	3.51	0.868	3.58	0.743
2. 聴解能力	4.13	0.719	3.66	0.854	4.14	0.706
3. 読解能力	4.25	0.683	3.64	0.895	3.81	0.776
4. 文章表現能力	3.94	0.929	3.51	0.994	3.53	0.947
5. 口頭発表能力(プレゼンテーション等)	4.19	0.834	3.30	1.006	3.78	0.744
6. 会話能力(コミュニケーション能力)	3.63	1.258	3.28	1.051	3.80	0.783
7. 日本社会文化についての知識	3.31	1.195	3.37	1.104	4.00	0.803

表1 習熟度別にみた満足度と上達認識度 mean=平均値 sd=標準偏差

全体的にみると、満足度及び上達認識度ともすべて5段階スケールのうち、3以上の平均値であった。まず満足度についてみると、初級は5項目のうち4項目の平均値が4以上である。しかし標準偏差のばらつきが上級に比べると大きい。中級は初・中・上級の中で最も満足度が低くなっている。標準偏差値も他に比べて大きいことから、満足している人とそうでない人の差が大きいといえる。上級は「先生の説明がわかる」という満足度が4.37と最も高くなっており、教師の発話内容を理解できることから満足を得ているようだ。一方、中級はばらつきが多く、全員に満足していく授業を行うのは他のレベルより難しいともいえる。

次に上達認識度については、初級は7項目のうち4項目が4以上で、もっとも高い。これは殆どゼロの状態から半年で集中的に日本語を学ぶために、上達したという意識が高くなるのかもしれない。特に読解能力が最も高いのは興味深い。それに対して、7.日本社会文化についての知識については3.31と最も低くなっている。これは初級の言語能力ではまだ十分に社会文化的な知識を得るまでには至っていないことが起因しているのではないか。中級は上達度においても他のレベルに比して低い。特に会話能力は3.28と上達認識度の中で最も低い平均値となっている。このように、会話能力については初級・上級レベルでも他の能力に比べて伸びたという認識が低いことから、「話す」「書く」などの産出能力は、「読む」「聞く」などの受容能力に比べて、伸びを自覚しにくいのではないか。上級では「聴解能力」を最も伸びたと感じており、文章表現能力の伸びが比較的低いことから「産出」能力の向上は自覚しにくく、自分では測りにくいともいえる。

6. まとめと課題

鈴木他(2010)が定義しているように、本プログラムで向上させたいと志向している「AJ能力」とは、①大学での勉学に必要な言語要素の習得や言語運用のスキル、②いわゆる大学教育で求められる問題発見解決能力や批判的思考力、対照比較分析能力など両者を統合したものである。このように4技能を総合的に使った授業として全学日本語プログラムの「集中」「総合」日本語授業の取組を紹介した。

そして、2010年度春学期末に行った受講学生に対するアンケート調査の中から、本プログラムの授業に対する満足度と授業を受けてどの能力がどのぐらい上達したと感じているかの項目について考察した。

まず、授業に対する満足度については初級がもっとも高く、上級では「教師の説明がわかる」といった特定の項目が高かった。中級は初級・上級に比して全体的に

低かった。その上、標準偏差値も高く、個人差が大きいことが窺える。これは300レベルの報告でも指摘しているように、来日前に自国で初級を終了して来た学生が、日本留学前の学習スタイルや学習内容・程度との違いなどを感じ、それが満足度に影響している場合もあるとも考えられる。今後学生へのインタビュー調査なども必要であろう。

能力の伸びの認識については、文法・読解・聴解など言語要素や受容能力のほうか伸びたことを認識しやすく、「話す」「書く」のような産出能力は、伸びが自覚しにくいようである。しかし、400レベルの報告にもあるように、達成したことが具体的に記述される can-do statements であれば、産出能力の伸びが自己評価しやすくなるとも考えられる。今回の調査結果ではあくまでも傾向をみたにすぎず、因子間の関連性まで明確に示されているわけではない。例えば、JSL 環境²²によりアクセスしている学生は満足度が高いかもしれないなど、習得促進の要因の特定については別稿の課題としたい。また、今回の回答者は総合日本語だけでなく技能別クラスを履修している学生も若干含まれているため、集中・総合日本語のみの評価とは言いがたい。

「全学日本語プログラム」は、多様なカテゴリーの学生に対して、AJ 能力を高めることを目指してシラバスを組んで授業を行っている。それだけに課題や問題点もある。学生の多様性にどのようにどこまで対応できるのか、それを明確にしていく教育研究が求められる。今回のアンケート調査は一例であったが、学生にとってよりよい教育のため、今後も学生の評価に常に耳を傾けながら、改善を図っていきたい。

参考文献

- アンドリュウ・ガーストル (2010) 「英国および欧州における日本学教育の変化」『世界の日本語・日本学～教育・研究の現状と課題～国際シンポジウム報告集』東京外国語大学国際日本研究センター 11-16
- 門倉正美 (2006) 「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力ーアカデミック・ジャパニーズからの発信」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房、3-20
- 工藤嘉名子 (2010) 「アカデミック・プレゼンテーション能力を養うためにーコンテンツベース教材を用いた段階的指導法ー」東京外国語大学留学生日本語教育セ

²² 第二言語習得では、日本に住んで生活の手段として習う日本語を JSL (Japanese as a second language) と呼び、日本語を母語とする人が周りにいる環境を JSL 環境という。

ンター日本語教育国際シンポジウム「大学におけるアカデミック・ジャパニーズの現状と課題」配布資料

坂本恵 (2005)「全学日本語プログラムの立ち上げと現状」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第31号 185-196

鈴木美加・中村彰・藤森弘子 (2010)「アカデミックな日本語運用能力を高めるために－中～上級クラスの実践から見えてきたこと－」『第15回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム』口頭発表レジュメ

當作靖彦 (2010)「中等・高等教育における日本語教育におけるアーティキュレーションの達成－今後の支援活動・交流活動のアクションプラン－」『世界日本語教育大会基調講演等予稿集』133-139

横田淳子 (1990)「専門教育とのつながりを重視する上級日本語教育の方法」『日本語教育』71号 日本語教育学会 120-133

ヨーロッパ日本語教師会 (AJE) (2005)『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』国際交流基金

参考資料

JLC日本語スタンダード研究会 (2007)『JLC日本語スタンダード 中間報告 2007』東京外国語大学留学生日本語教育センター

JLC日本語スタンダード研究会 (2006)『JLCシンポジウム報告書－日本語スタンダードを考える－』東京外国語大学留学生日本語教育センター

東京外国語大学「全学日本語プログラム (JLPTUFS) 履修案内」2008年度秋学期、2009年度春学期版・秋学期版、2010年度春学期版

http://www.tufs.ac.jp/intlaffairs/international_student/ 参照 (2010.10.18 アクセス)

東京外国語大学 (2010)『東京外国語大学データ集』平成22年度版

東京外国語大学留学生日本語教育センター (2009)「JLC日本語スタンダード 2009 改訂版」

東京外国語大学留学生日本語教育センター全学日本語プログラム運営委員会 (2010)「全学日本語プログラム学生アンケート」集計結果

(独) 日本学生支援機構政策企画部広報課 (2010)『JASSO 日本学生支援機構 2010 概要』

http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/shiryoku01_22ryukyo.pdf

文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/09/1298068.htm

○「留学生政策と大学の国際化について」(平成22年7月8日)

○「留学生の日本語教育に関する懇談会」取りまとめについて(平成22年9月29日)

留学生日本語教育センター初級総合教材開発グループ(2010)『大学生の日本語
(Elementary Japanese for Academic Purposes) Vol.1, Vol.2 試用版』東京外国
語大学留学生日本語教育センター